

学位申請論文

審査報告書

2022年2月24日

関西福祉科学大学 大学院
社会福祉学研究科長 様

学位申請論文審査委員会

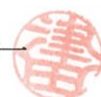
主査 教 授 安井 理夫



副査 教 授 畠中 宗一



副査 教 授 津田 耕一



下記のとおり、学位申請論文の審査結果を報告いたします。

記

学位申請論文提出者 松本 眞美

学位申請論文題目 ホームヘルプにおけるアセスメントと支援方法に関する研究
—生活モデルによる関与しながらの支援の意義—

学位授与申請受理年月日 2021年12月20日

I 学位申請論文の内容要旨

本論文の目的は、非専門的であるといわれるホームヘルパーのアセスメントや支援技術の特色を明らかにすることをとおして、利用者中心の支援として介護保険制度をうまく機能させるための手立てを探索することである。

その前提として、つぎの2つの問題意識が示されている。① 介護をめぐる社会システム全体が利用者中心とはいえない方向に進んで行っている、② そのため、介護保険制度のなかにホームヘルパーが役割を果たせる環境が矮小化の一途をたどっている。これら2つの課題意識のもと、本論文は7章から構成されている。

序章では、介護保険制度や社会福祉の資格制度が生活モデルとは異なった方向に進んでいき、それにもなつてホームヘルパーの専門性や業務が矮小化してきたことを指摘したうえで、研究の目的、意義、方法について述べている。

第1章では、ホームヘルパーに関する文献レビューを行い、ホームヘルプの二大潮流とされる家庭養護婦派遣事業や臨時家政婦派遣制度においては、「生活」への鋭い感性という高い専門性を要求されながらも、家事を中心とした女性職だとみなされて社会的評価が低かった点を確認したうえで、介護保険制度が制定されてからは家事を中心とした誰にでもできる仕事としてその専門性までが剥奪されてきた経緯を明らかにし、それが制度自体が生活モデルから逸脱していくプロセスと軌を一にしているとの認識から、介護保険制度を生活モデルにもとづいたものにノーマライズする鍵はホームヘルパーの支援にあると、その重要性を述べている。

第2章では、予備調査として、家族介護者支援に関するインタビュー調査、家族介護者に関する情報把握についての FGI 調査について述べ、「場」を活かした情報収集や臨機応変な対応など継続的な関与しながらの観察がヘルパーの強みであることを見いだしている。また、家族アセスメントに関する文献検討をとおして、ホームヘルパーの現場で生活モデルにもとづくアセスメントを行っていることの検証が必要であると述べている。

第3章は、ホームヘルパーが行うアセスメントに関する調査である。調査の対象となった事例においては、利用者本人への自立支援が妻としての夫への働きかけや役割の回復につながり、それが夫の再生を支援することにもつながっていったと指摘し、生活援助をすることにより家族の関係性に変化をもたらすというヘルパーの存在意義と、日常にある安心感をもたらすありふれた生活を一緒に具現化していくヘルパーとの関係性の継続を家族

が望んでいることなどが述べられている。

第4章は、ホームヘルパーが行う本人・家族介護者への支援に関する調査である。調査対象である事例をSCATによって分析した結果、家族介護者の情報を想像と実際のすり合わせを行いながら得ていること、アセスメントと支援を瞬時に繰り返し修正しながら支援を行っていること、制度上の業務と、気働きというコミュニケーションの2つを行いながら自分なりの支援方法を見いだしていくという過程が存在している可能性が示唆されたと述べている。

第5章では、これまでの議論をふまえて、① 制度によって標準化された支援と利用者のニーズとのあいだにあるグレーゾーンの部分を必要な支援として解釈し支援することでホームヘルパーは介護保険制度を生活モデルにもとづいて機能させる促進要因になること、② 関与しながらの観察として行われるアセスメントは利用者中心に支援の舵を切るための有用な情報であることについて述べ、制度中心ではなく、利用者・家族介護者が中心であり、それらと専門職をつなぐ位置にホームヘルパーを置くために必要なこととして、裁量権の拡大、技術習得のための研修体制の構築、介護福祉士養成教育の見直し、組織内の改革の4つをあげている。

終章では、今後の展望と課題について述べている。人と環境の交互に影響しあう関係性がそれぞれの生活を豊かにしていく。本研究の意義は、現場の声を分析して、そのようなホームヘルパーの支援の詳細を帰納的に明らかにしたことであるとしている。

II 学位申請論文審査結果の要旨

1. 問題設定：非専門的であるといわれるホームヘルパーのアセスメントや支援技術の特色を明らかにすることをとおして、利用者中心の支援として介護保険制度をうまく機能させるための手立てを探索するという研究の目的は、臨床福祉学との関連において適切である。
2. 先行研究：ホームヘルプの黎明期における位置づけと実践、介護保険制度がはじまってからのホームヘルパーの位置づけの変遷など、関連領域の先行研究が適切にレビューされている。

3. 論文構成：問題の所在から結論に至るまでの内容がフローチャートで示された構成どおり論理的に記述されている。
4. 研究方法：ホームヘルパーの支援技術がどのように利用者中心の支援に寄与するのかを明らかにするという研究目的に対して、現場のホームヘルパーへのインタビュー調査、実践事例調査を通して帰納的にまとめていくという研究方法は適切である。
5. 研究倫理：研究倫理が遵守されている。調査研究については本学において承認番号 17-21 として承認を受けている。
6. 社会貢献：本論文は、松本氏がホームヘルパーとして実践するなかで感じた問題意識が執筆の出発点となっている。したがって、研究は利用者や支援者に対するサービスの質の向上をめざした現実的で有用な内容に終始した論文と評価する。
7. 学術貢献：本論文に関連して、論文執筆（査読付）が5編ある。このことは本研究が一定の社会的評価を得ている証左である。ホームヘルパーの支援技術を帰納的手法を用いて明らかにした業績は学術的に意義があり、臨床福祉学の発展に寄与する内容であると考えられる。
8. さいごに、松本氏も記述していることであるが、本研究は調査対象者が少なく分析方法も多くなかったこと、多職種協働の新しい仕組みについては十分に検討できなかったことなどについて課題を残している。今後に期待したい。

Ⅲ 最終試験結果の要旨

上記の学位申請論文審査結果のとおり、審査委員会は全員一致で本学位申請論文を博士（臨床福祉学）の学位を受けるに値すると判定しました。

IV 公聴会の日時

2020年2月24日

V 審査委員会の所見

本学位申請論文審査委員会は、本論文が、ホームヘルパーの支援技術に関して新たな知見を提示した内容であり、博士学位に相応しいものと判断します。

以上